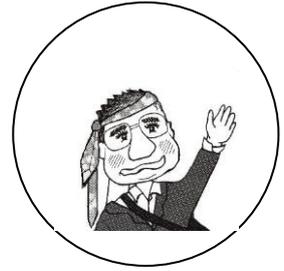


大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

霧が覆い隠すシッキム王国の“神秘” (4)

そろそろ本題の「シッキム王国」の話に進まなければならないのだが、まず読書諸氏にお詫びしておかなければならないことがある。最初に「少女の夢をかなえてあげたい」と述べたが、まるでわが輩が幼い「少女」と連れ立って行ったかのような誤解を与えてしまったかもしれない。いや、勘が良い読者はすぐにお気づきであったとおもうが、「昔は少女であった」という意味で、大よそ67年程まえの「少女」のことである。

しかも高校生か女子大生のころに『未開の顔・文明の顔』を読んだというから、「少女」ではなくすでに「青年期」であったことが分った。いずれにしても、一冊の本がほのぼのとした夢を「少女」に与え続けたことは素晴らしいことである。

わが輩も数十年前に読んだので書棚を探してみたが、見つからなかった。それで中古文庫本を取り寄せて再読してみた。アッサム、ヒマラヤ、カルカッタの章は読んだが、後半のヨーロッパ諸国などの章は読んだ記憶がない。たぶん適当に読んで、ツンドク（積ん読）状態であったのだろう。後半もイギリス人とインド人との違いなど、「ふうん」と唸るぐらいおもしろい。

『未開の顔・文明の顔』の著者は、東大で初めての女性教授（社会人類学）になった中根千枝先生である。そのころの院生がわが恩師小西正捷先生（文化人類学）であった。

大学時代に、わが輩の学友が訊ねた。

「中根先生はどのような先生ですか」

わが恩師は少し考えて、

「あれは女（女性）ではないね」

今日の発言なら、女性差別と受け取られかねないが、著作を読むと「よくまあ、あの時代（1953年）に女性が一人で未開の地に足を踏み入れたものだ」と驚嘆するばかりである。

中根先生の著者紹介の顔写真をみると、随分目鼻立ちがしっかりした、度胸と根性をそなえた（失礼ながら）どちらかと言うと男っぽい顔に見える。軟弱な色恋よりも、エキサイティングな（元）首狩り族！や虎狩り！に関心をお持ちの方かとおもいきや、『未開の顔・文明の顔』の後半のヨーロッパ編ローマ（1957年）で「アモール」のシーンがあらわれる。お相手はローマ大学の科学を専攻する学生アントニオである。

お別れの晚餐はコレ・オピオ公園のレストランにて。

「シニョリーナ・チエ、僕のこと少しは好き？」

「多分、そうよ、私にもよくわからないけど」

このセリフで、わが輩は映画「ローマの休日」(1953年)を思い出した。ひょっとしたら、中根先生はこの映画を観て1953年6月にインドに出発したのかも、と思い調べてみた。日本初公開は1954年4月なのでその可能性はなかった。「野生の喜び」からローマの恋への劇的な変換で、わが輩の頭脳の中で、先生のフェイスがオードリヘップバーンに数秒間変換されたが、それはすぐに打ち消された。

「シニョリーナ、あなたは僕を愛しているのではない。あなたの愛しているのはローマだ。アントニオではない」

アントニオは低い声でつぶけた。

「シニョリーナ、アモールというものはそうではない。人間が人間に魂を捧げきることなのだ」

ギリシャ語のアガペーに相似する。神の人間に対する無償の「愛」のことである。しかしアモールは、人間が人間に対する無償の「愛」のことらしい。

イタリア人男性は女性のだれにでも声をかけると巷間いわれるが、先生のアモールは俗でもなく、オードリヘップバーン風でもなく、実に研究者風である。

「神の前で敬虔であり、すべてを捧げることのできる、このカソリック教徒のラテンの人々は、恋においてもそれは宗教的といってもいいほどの魂の昇華をみることができる」

インドで、ローマの教会で「しらずしらず何か祈りをしている自分を発見した」が、これは未開の顔ではなく、明らかに文明の顔だ。元首狩り族の儀礼のときは、驚いたが祈りはしなかった。この祈りの姿勢は、おそらくヒンドゥー文化思想の影響であろう。

さてさて、わが輩たちは自宅で午前4時に起床して、デリー空港に着いたのは午後10時50分(インド時間午後7時20分)、ホテルに落ち着いたのは午前1時(インド時間午後9時30分)であった。実に21時間の移動であった。わが輩も疲れたが、後期高齢者の元少女たちも疲れたであろう。しかしこれからが旅の始まりで、インド時間の午前4時に起床してデリー空港にむかった。デリーから東のバグドグラ空港まで約2時間。左席から、遠方にヒマラヤ高峰が輝いているのを眺めることができた。

空港でドライバーのプラナイさんが待っていた。ダージリンの旅行会社のワンデンさんが手配してくれた。ワンデンさん一家は2018年に日本観光にやってきた。そのときご縁があって、ボランティアで関空出国のお世話をしたことがあった。人さまのお世話はしておくものである。今度はわが輩がお世話になることになった。プラナイさんはネパール系仏教徒で、ワンデンさんご推薦のドライバーである。

「彼は他のドライバーのように急がせることなく案内してくれる。それに彼は雇われ運転手ではなく自家用車で仕事をしている」

もう一つ、彼には他のドライバーにはできない得意ワザがある、とワンデンさんが言った。さて、その得意ワザとは何か。これからその得意ワザを見ることができるのか、楽しみである。